



生足メイド達に足で酷使されたお 仕事用スリッパの匂いで俺の理性 は破壊される

第一章：巡回者の夜

夜の街が完全に沈黙に包まれる午前二時。

薄暗い商業ビルのフロアを、警備員・高瀬祐介（32）は淡々と歩いていた。

清潔な制服に、手入れの行き届いた短髪。無表情ながらも整った顔立ち。

どこからどう見ても、真面目一徹の勤務者。

彼は実際、その通りの人間だった——少なくとも、外から見れば。

だが、祐介には、夜間勤務中に夜な夜な行っている誰にも言えない「習慣」がある。

それは、誰もいなくなった深夜のテナントに忍び込み、脱いである女性従業員の靴の匂いをこっそり嗅ぐことだった。

パンプス、スニーカー、サンダル、ヒール——。

どれも昼間は働く女性たちの勤務中の足を包み、汗を吸い、匂いを溜めていたもの。

靴の見た目や汚れから履いていた女性の年齢、顔を想像しながらその靴の匂いを嗅ぐ事が彼の最大の快樂だった。

(3階のイタリアンレストラン、裏口の扉がロックされてなかったな……)

祐介は呼吸を整え、足音を殺して目的の店へと足を向ける。

鉄製のドアノブを回すと、キィ……と僅かな音と共に開いた。
中には、消灯された室内と、下駄箱に整然と並ぶ靴たち。

(これは……)

低めのヒール、つま先の擦れたパンプス、インソールが少し黒ずんだバレエシューズ。

(これはウエイトレスの子が履いてそうな靴だな…)

彼は一足手に取り、まるで聖なる儀式のようにそっと鼻先へと近づけた。

くんっ――

熟れた汗の香りに、ほんのり石鹸のような女の子の甘さが混じる。

彼の鼻孔を満たすのは、おそらく 20 代前半のホールスタッフの女の子が一日中立ち仕事で履いていたであろう靴の蒸れた匂い。

「……小柄で、汗っかきな感じだな……中敷きに指跡がしっかり黒ずんで残ってる……」

そうつぶやきながら、祐介は自分の欲望を抑えきれず、もう一足——そしてまた一足、と手を伸ばしていく。

だが、それでも彼は完全に理性を失っていたわけではない。

しっかりと周りへの警戒は怠らない。

これはバレたら終わりだ。そう思いながらも、どうしてもやめられない。

（俺は、狂ってるのかもしれない……）

そう心で自嘲しながらも、指先は確実に次の扉を開こうとしていた。

* *

そこは、今日初めて確認する新しいテナント——4 階、空き店舗に 1 年ほど前に入った店だ。

エレベーターで4階へと上がる。警備の名目でカードキーをかざし、テナントフロアに入ると、廊下の奥にキャッチーな雰囲気看板が目に入った。

「生足メイド喫茶 ～FéeMignonne～」

——フェ・ミニョンヌ。直訳すれば、「可愛い妖精たち」。

「……生足メイド喫茶、だと……？」

喉がひくりと鳴る。

メイド喫茶＝若い女性ほぼ確定。

それもコスプレ的な要素に素足での接客。フェチ性の塊としか思えないコンセプト。

祐介は息を潜めるように近づき、非常口側の従業員出入口に手をかけた。

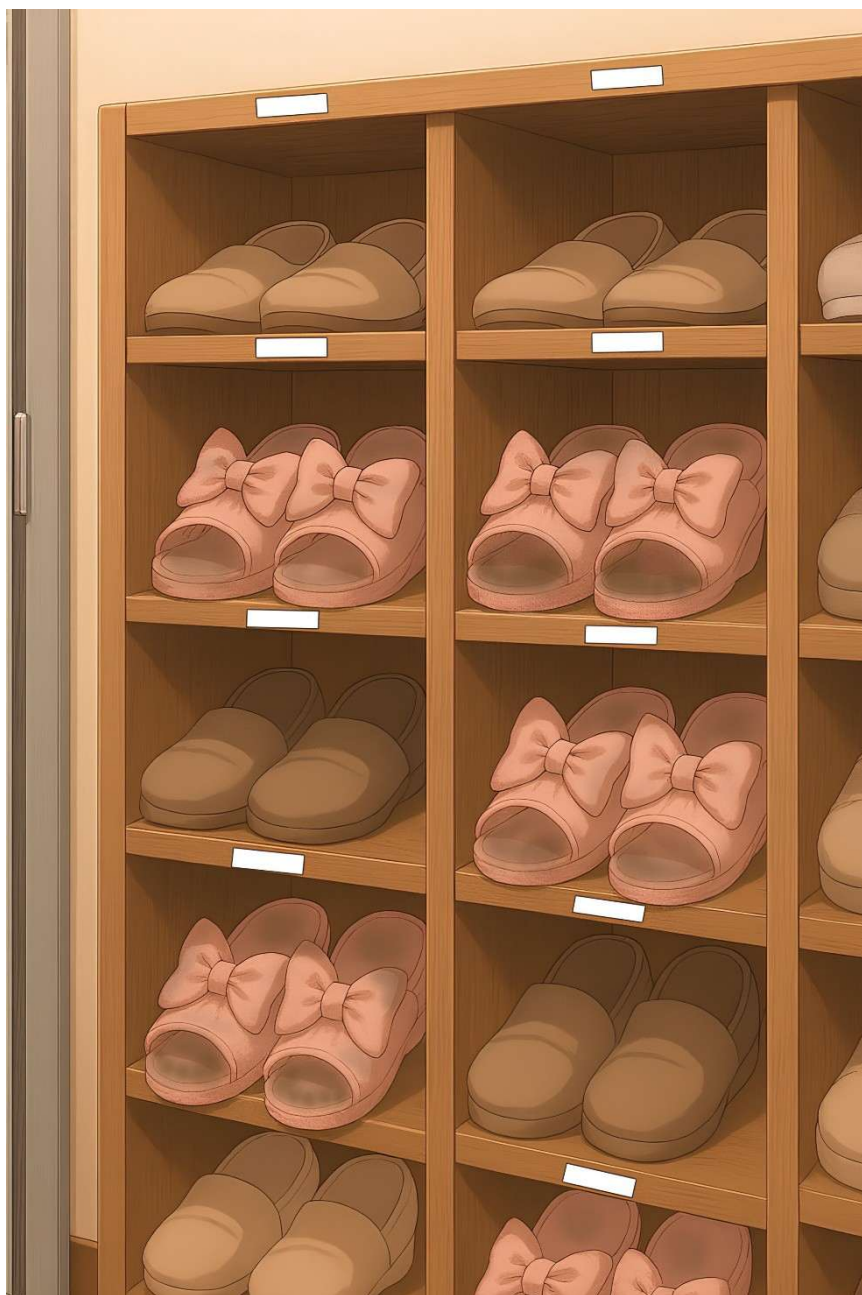
——カチリ。開く。運良く、オートロックの設定はされていないらしい。

（この感じ……間違いない。当たりだ）

ドアの隙間から、ひんやりとした店内の空気が漏れ出す。

そしてそのすぐ脇——従業員用の下駄箱があった。

祐介は一步、足を踏み入れた。
そして目の前に広がった光景に、言葉を失
う。



キッチンスタッフや裏方スタッフらしき靴に紛れて並んでいたのは、お揃いの可愛いリボンがあしらわれたパステルピンク色のサテン地のオープントウスリッパ。

踵は少し厚めでヒールスリッパのようなデザイン。

明らかにここで働くメイドが履いているのであろうスリッパ達。

そして素材が布製のせいか、足裏、指の当たる部分にはそれぞれ黒ずんだ足形が程度の差はあれしっかりと残っている。

「……全員、素足で……このスリッパ、履いて接客してるってことか……」

圧巻の光景に彼の呼吸が浅くなった。

鼻がピクリと動く。

脱がれたスリッパからは、ほのかに湿気を残した女の汗の匂いが漂っているように感じた。

嗅ぎたい。すぐにでも――

だが、祐介は自分を抑える。これは特別だ。今までとは違う。

(……楽しみは、吟味してゆっくり味わうべきだ)

祐介はゆっくりと下駄箱の前にしゃがみ込んだ。

パステルピンクのサテン生地。光沢を帯びた布地。オープントゥ。

どの一足にも、決して機械では再現できない“人の痕跡”があった。

一つひとつ、違う。

指の跡の濃さ。

布地の擦れた形。

つま先部分にだけ黒ずみが集中しているもの、足裏全体がうっすらと染みついたようなもの。

サイズもまちまちで、大きめのものから、祐介の好みに刺さる“小さめ”のものまで——

「……これ全部……メイドが……」

呟く声が震えていた。

想像する。あの清楚なメイド服を着た、若い女の子たち。

素足でこのスリッパを毎日履き、閉店まで汗をかいて、笑顔で愛想を振りまきながら店内を動き回って……その匂いを染み込ませている——。

顔も名前も知らない。

でも、この黒ずみは“彼女たちの足”が確かにそこにあった証。

蒸れ、汗、皮脂、体温、足裏の癖——全てがここに残っている。

心臓がバクバクと早鐘を打つ。

喉が渇く。手のひらがじっとりと汗ばんでくる。

本当なら、全部嗅ぎたい。

時間をかけて、ひとつひとつの匂いの違いを確かめ、想像を膨らませたい。

誰が一番蒸れていて、誰がどんな香りを残しているのか——。

しかし長居は危険だ。
いつ誰かが巡回に気づくとも限らない。

選ばなければならない。今、この一足に賭けるしかない。

祐介は、本能で選んだ。

小ぶりのサイズ。
指の当たるオープントゥ部分に、くっきりと
黒い五本の指跡が残っている。

その汚れ方は異様なまでにリアルで、皮脂の
重なりを感じさせる濃さだった。

「……これだ……」

ゆっくりと、震える手でスリッパを持ち上げる。

手の中でふわりと揺れるその軽さ。けれど、そこに込められた重みは——彼にとってとてもなく淫靡なものだった。

そのまま、顔を近づける。

オープントウの“開いた口”から、鼻先を滑り込ませていく。

目標はただ一つ——黒く染みついた指跡の匂い、女の蒸れた生の匂い。

……くんっ。

鼻腔を満たしたのは、リボンの付いた可愛い見た目とは裏腹に、濃密に沁み込んだ足の匂いそのものだった。

くっきりと染みついた指跡からは、納豆やそら豆のように熟成された発酵臭と汗の酸味。

その奥に、ごく微かに香る女の子っぽい甘い香り。

「……っ、これ……は……」

祐介の全身に震えが走る。

脳が焼けるような衝撃と、背中をつたうゾクゾクする快感。

生々しくて、汚れていて、でもどこか女の子

らしい——最もリアルで、最も興奮する匂い。

鼻を押し付ける。
もう一度、深く、くんっ——

息を吸うたびに、彼女の汗が染み込んだ繊維が、鼻先で微かに湿り気を帯びて吸い付いてくるようだ。

（この子……少し脂足なのか…？足裏に汗かきやすくて、しかもこの汚れ方……おそらく洗ってないに違いない……）

匂いだけで、その“彼女”の姿が脳裏に浮かぶ。
可愛らしく、無垢そうで、でも足はこんなに
……。

祐介はその場から動けなかった。
ただ、下駄箱の前で、スリッパに鼻を差し込み、顔も名前も知らないメイドの足の痕跡に
酔いしれる。

(そろそろ切り上げないと…)

頭では分かっているが、本能が止まらない。

繰り返しオープントゥの口に鼻をぐっと押し込み、指跡に直接、鼻腔を擦りつけるようにして嗅ぐ。

——くんっ……くんっっ……！

（つま先が開いてる靴なのに……こんなに濃い匂いするのか……）

湿った匂いが鼻の中を這い回る。
スリッパの生地が微かに肌に吸いつくようなぬめりを持ち、祐介の理性を根こそぎ奪っていく。

たまらなかった。
背徳感も、羞恥も、警備員としての誇りも、

すべてが霞んでいく。

この匂いの主と、頭の中で作り上げた“理想の彼女像”が、完全に一体化していた。

（この足で、俺の顔を踏んでほしい……この匂いのまま、口を塞がれたい……）

息を荒げながら、祐介はもう抑えられなかった。

スリッパに鼻を押し付けたまま、下半身の疼きを右手で押さえ——

勤務中という事も忘れ、その場で果てた。

肩が震える。吐息が漏れる。
だが、全身を満たしたのは、深い、深い満足感だった。

視界が揺れる中、祐介はゆっくりとスリッパを元に戻した。
震える手を膝に乗せ、目を閉じたまま、しばらく動けなかった。

(……この店……やばい……)

あの匂いの主に会いたい。
誰が、どのスリッパの持ち主なのかを知りたい。
次は、昼の顔で——客として——この店に来るしかない。

だって、あの匂いは、もう俺の理性を壊したんだ——。

第二章：来訪者

——あのスリッパの匂いが、頭から離れなかった。

つま先に染み付いた、あの濃密で熟れた足臭。

汗と皮脂の層に、女の子らしい柔らかな石鹸のような残り香。

あの夜、鼻先に直接感じた感触と温度が、何度も夢に出てきた。

そして祐介は決意した。
次の休み——あの匂いの主”を見つけに、客として店を訪れる。

* *

週末の午後。
再びあの商業ビルへと訪れ、
《FéeMignonne》の扉をくぐった。

カラン——というベルの音と共に、店内から
柔らかな香りが漂ってくる。

おしゃれなアロマ、甘いお菓子、紅茶、そして
ほんの微かに——あの夜感じたのと同じ、
甘い石鹼のような女の子の香り。

「お帰なさいませ、ご主人様♪」



出迎えたのは三人のメイドだった。

黒を基調としたクラシカルな制服。スカートの裾からすらりと伸びる素足。

そしてその足元には、あの夜、下駄箱に並んでいたピンクのスリッパが、まるで自然に溶け込むように履かれていた。

「……っ」

祐介は無意識に喉を鳴らした。

視線がまず向いたのは、左側の少女。

凜とした瞳に整った顔立ち。穏やかでしっかりした雰囲気の一美月（みづき）（19）。

次に中央の少女。黒髪ロング、柔らかな物腰。清楚で優しい空気を纏う一雪乃（ゆきの）（21）。

そして右側。どこかぽやんとした表情、にこやかな笑顔。おっとり天然そうな雰囲気の一
千春（ちはる）（22）。

三者三様。けれど共通するのは——みんな可愛い。

それもありハイレベルの可愛さ。

スラリと長く伸びた足元では、三人とも素足にピンクのオープントゥスリッパを履いている。

よく見ると、つま先の布地は足指越しでもうっすらと黒ずんでいるのが分かった。

(……あのスリッパの持ち主はこの中にいるのか…?)

祐介の下腹部が、ぴくりと疼いた。

先日のあの夜。選び抜いた一本のスリッパに鼻を押し付け、本能のまま果てたあの記憶が蘇る。

冷静を装って案内される間も、祐介の視線は
つい足元に吸い寄せられる。

色白で綺麗な脚。踵は少し赤らんでいる。

歩きながら足指が少しズレるその一瞬の隙に
見えた、スリッパと足のあいだの布地がわず
かに湿って黒ずんでいて、すでに匂いを想像
させるには十分だった。

——さらに、周囲を見渡して祐介は息を呑
む。

他にも数人のメイドが、笑顔で接客してい
た。

全員、あのスリッパ。全員、素足。全員が
……可愛い。

(やばい……この店、大当たりだ……)

喉が乾く。

鼻が利き始める。

そして、股間が疼く。

ただ見るだけで、嗅いだ記憶が蘇り、理性が
溶けていく。

この店の中の誰かが、あのスリッパの匂いを
——祐介を壊したあの匂いを持つ本人なの
だ。

（誰だ……誰なんだ……どの子が、“俺の鼻を支配した”あの匂いの持ち主なんだ……）

祐介の心は、すでに穏やかにただメイド喫茶を楽しむ感じではなかった。

今この瞬間から始まるのは、匂いの記憶を辿る探索の時間。

そしてその先に待っているのは——さらなる背徳と、快楽の地獄。

「ご主人様は……今日が初めて、ですよ
ね？」

ふわりと微笑みながら、祐介の前に立ったのは、先ほど出迎えてくれたメイドのひとり——美月だった。

茶色の髪をゆるく巻き、控えめなリボンでまとめたその姿は、どこか品のある落ち着きを纏っていた。

目元は涼しげで知的な印象。なのに、笑うと柔らかくなって親しみやすい雰囲気になる。

「最初は私からいろいろご説明させていただきますね」

「こちら、メニューです。ご飲食の他に、チェキ撮影やお話延長、あとは……お気に入りのメイドをご指名いただくこともできます」

そう言って、両手で差し出されたメニュー表。

祐介はそれを受け取りながらも、視線をすぐにはそこに落とせなかった。

美月の顔から——首筋、胸元、ウエスト、スカート、そして脚へと、視線を下ろしていく。

（すらっとしてて……）

無駄な肉のない、均整のとれた脚。
肌は色白で、ふくらはぎの内側にはほんのりと青い静脈が透けている。

どこまでも清楚で上品な、そんな脚。

そして、その脚の先に——
祐介の記憶を強烈に刺激する、ピンクのサテン地のスリッパ。

(……履いてる……)

目を奪われた。
艶のあるパステルピンクのサテン地。その可愛らしさとは裏腹に、しっかりと使用感がにじみ出ている。

踵部分は生地がわずかに潰れ、つま先部分——オープントゥの内側からは、じんわりと足指の汚れが透けて見えていた。

皮脂と汗が混じり合い、ピンクの布地に濃淡のあるシミとなって染みついている。

それだけではない。スリッパの甲にあしらわれた可愛いリボン——そこにも、薄く黒ずんだ汚れが残っていた。

恐らく、何度も手でつまんで脱ぎ履きした結果だろう。だがその汚れですら、祐介には淫靡に見えた。

（ああ……めちゃくちゃ良い……）

理性がじりじりと後退していく。
目の前の美月がどれだけ真面目に説明をしても、祐介の脳内は完全に“足”と“スリッパ”で支配されていた。

あの夜、鼻を突っ込んだスリッパ——あれと同じような匂いが、今この足の中に染み込んでいるのか…。

想像するだけで、喉が乾く。

（この子が、あの匂いの主なのか……？）

想像と妄想が溶け合い、脳内で美月のイメージが出来上がっていく。

（接客中、店の奥で一息ついた時——彼女はこのスリッパを脱ぎ、素足をさっと広げて……。）

「……ご主人様？」

「——っ、あ、すみません。はい、初めてで……」

思わず声をかけられて、現実には引き戻された。

祐介はなんとか笑顔を作り、美月の瞳を見つめ返す。

だが、その瞬間すら——祐介は彼女の背後、ふわりと立ち上る蒸れた足の空気のような残り香を、幻覚のように感じていた。

(……この子かもしれない。いや、違うかもしれない。でも……もう、だめだ。気になって仕方ない)

祐介の股間が、疼いていた。
理性が静かに、しかし確実に崩れていく音が、頭の奥で響いていた――。

目の前で微笑む美月の声が、どこか楽しげに響いた。

「ご主人様ったら……さっきから、私の足ばっかり見ちゃってますね」

びくり、と祐介の身体が跳ねた。
その瞬間、自分の視線がどれほど長く彼女のスリッパに釘付けになっていたかを、改めて痛感する。

「あっ……い、いえ……っ、その、ちが
……」

言葉にならない言い訳が喉で絡まり、視線が泳ぐ。

だが、美月はくすりと笑いながら、まったく責める様子ではなかった。

「ふふ、大丈夫ですよ」

「うち、《生足メイド喫茶》ですから。足を見られるの、慣れてます」

その言葉に、祐介の心臓が跳ねた。

“足を見られる”ことを前提とした店——
それを、美月が完全に理解し、受け入れてく
れているという事実。

「むしろ……気に入ってもらえたなら、嬉しいです♡」

その一言に、祐介の胸がざわついた。
あの足にあのスリッパ、そしてこの女の子自身が、“見られること”に少しも嫌悪感を持っていない。

「うちのお店の子、皆スタイルいいですし、
脚も長くて綺麗なんですよー」

「気に入った子がいたら、遠慮せずに言って
くださいね♡ご指名も大歓迎ですから」

その言葉に、美月の足元へと再び視線が滑ってしまう。

（この足で、たぶん一日中接客してるんだ……このまま、履きっぱなしで……）

鼻腔にあの夜の匂いが蘇る。

同時に、向かいのテーブルにいるメイド——おっとりとした顔立ち、ほんわかした雰囲気の子——千春の姿がふと目に入る。

お客さんと楽しそうに話しながら、右足のスリッパを脱いだり履いたりを繰り返している。そのスリッパにはしっかりと足指の跡。

(あの子……もしかしたら……)

理性と欲望のバランスが傾くのを感じながら、祐介はメニュー表に目を落とした。

その表紙の上に置かれた美月の手指は綺麗で、けれどその奥、テーブルの下で足先がひくりと動くのが目に入る。

「……じゃあ……せっかくだし、ドリンクはこれで……それと、指名も」

「はい♡どの子がよろしいですか？」

祐介はほんの少しだけ、視線を外すようにして言った。

「…………千春さんで」

「かしこまりました～♡千春ちゃん、呼んで
きますね」

美月はにこやかに礼をし、スカートをふわり
と揺らして立ち上がる。

その動きに合わせて、スリッパの中で彼女の
素足が一瞬だけ滑るように動き、指跡の汚れ
が布地に沿って深く沈んでいく。

祐介の喉が、また音を立てて鳴った。

(……さて。次は、“あの子”の足、か……)

じわじわと、興奮が股間を持ち上げる。
この店で、“あの匂い”をたどる旅が——本格的
に始まろうとしていた——。

* *

しばらくして、美月が再び現れた。
その後ろから、ふんわりとした雰囲気の子
子がドリンクトレイを両手に抱えてついてく
る。

「お待たせしました～♡ご指名の千春ちゃん
です」

「こんにちは～。千春ですっ、ご主人さま♪
ドリンク、置きますね～」

柔らかな声と笑顔。
どこかゆるい口調で、優しく微笑むその表情
は、見ているだけで癒やされる。

長めの前髪の内から覗く瞳はとろんと潤んで
いて、思わず引き込まれそうだった。

祐介はその顔を見て、思った。

(……この子も……めちゃくちゃ可愛い
……)

黒いメイド服の裾から覗く脚は、白くすらりと長い。

腰つきや太もものラインも柔らかく、全体的にやや丸みのある体型——**男性が本能的に好む“抱き心地の良さ”**を感じさせる。

そしてもちろん、その視線の行き着く先は……足元。

千春も例外なく、ピンクのサテン地のオープントウスリッパを履いている。

足先がスリッパから覗くたび、ぷっくりとした足指が可愛らしく揺れ、足裏の蒸れを想像させる微かな光沢が肌をなぞる。

「ご主人さま、うち来るの初めてなんですか～？」

「あ……はい。今日、初めてで……」

「そっか～。うれしいなあ。来てくれてありがとうございます～♡」

そう言いながら、千春は祐介の隣にちょこんと座った。

距離は近い。肩が触れるか触れないかというギリギリの位置。
そして、彼女は無意識のように、スリッパをかかとかから少しずつ脱いでいく。

——すっ、と音もなく、サテン地のピンクが床に滑り落ちる。

小さな白い素足がスリッパから抜け出し、つま先でスリッパの布地をもぞもぞと撫でるように弄び始めた。

(……っ)

祐介の鼓動が跳ね上がる。

目を逸らそうとしても、どうしても視界の隅に入ってくる——千春の“脱がれたスリッパ”。

そこには、明らかに黒ずんだ足型の汚れがくっきりと残っていた。

つま先部分には五本の指の跡。

足指～母指球のあたりまでが特に濃く、皮脂が何層にも蓄積されたような暗い染みになっている。

かかと部分もわずかに凹み、サテンの柔らかさが失われている箇所もある。

美月のスリッパと同様——いや、それ以上に“履き込まれていた”。

（これが……今、この子の足の裏に密着してた所……）

千春の足は、スリッパをいじりながら、時折浮かせたり下ろしたり。
そのたびに、かすかに足裏の汗が床に写るの

ではないかと思えるほど、じっとりとした湿度を感じさせる。

「えへへ……ご主人さま、静かですね～。緊張してるんですか～？」

「……い、いえ。あの……なんか、ちょっとドキドキしてて」

「ふふっ、なんか可愛いです～♡」

無邪気に笑う千春。

だが、祐介の視線は足元から離れない。

何度も目を逸らそうとする。

けれど気づけば、またスリッパの中を見てしまっている。

汚れ、跡、湿り——彼女の足が刻んできた時間の痕跡が、そこにはあまりに生々しく残っていた。

（この子か……？）

またしても、祐介の中で疑念と興奮がせめぎ合う。

あの夜、自分の理性を壊したスリッパ——その持ち主が、今、目の前にいるのかもしれない。

心拍数が上がる。

汗がじんわりと背中に滲み始める。

気づかれまいと努めて平静を装うが、下半身はじわじわと熱を帯びていた。

(……この子の、スリッパの匂い……もし嗅げたら……)

想像だけで、祐介の股間が重く疼く。

この衝動が、どこへ向かうのか——彼自身すら、もう分からなくなり始めていた。

千春は、祐介の隣に座ったまま——

ずっと、足元でスリッパを弄んでいた。

足の甲で押し出すようにスリッパを脱ぎ、
指先でつま先をなぞるように引き寄せ、
またするりと足を滑り込ませては、すぐに脱ぐ。

脱ぐ、履く、撫でる、摘まむ、踏む——
そのすべてが無意識で、無自覚で、しかしあまりにもエロかった。

飾りとして甲の部分に縫い付けられたピンクのリボンも、千春の足の動きに翻弄されていた。

指先でリボンをつまんで引っ張ったかと思えば、
次の瞬間には、甲の裏側でぐいっと踏みつけ、ぐりぐりと押しつぶしている。

(やばい……っ)

祐介の視線は完全に足元に釘付けだった。
目の前で繰り返される、無防備でエロティックな“足遣い”。

何度も、何度も脱がれるスリッパの中には、
くっきりと足裏の形。

先端には濃い指跡、踵には染みついた汗の
層。

履き込まれたことで布地の毛羽立ちすら起きて
おり、そこに染み込んだ汚れが陰影を作っ
ていた。

(ああ……このスリッパ……もう絶対臭い。
絶対、蒸れてる……)

その想像だけで、祐介の股間がびくりと震える。

鼻腔の奥に、あの夜の匂いが再び広がっていく。

納豆のような発酵臭、長時間履いた汗の熟成した酸味、

そしてかすかに残る女の子らしい甘い香りの混合——

それは、たった一度で祐介の理性を壊した香りだった。

そして今——その匂いの源かもしれない足が、目の前で可愛いリボンを踏みつけて弄んでいる。

「……ご主人さま？」

突然、千春の声が降ってきた。

祐介はびくっと肩を震わせ、慌てて顔を上げる。

「……あ、はいっ……っ」

「ふふっ」

千春は、目を細めて微笑んだ。

「ご主人さまって……足好きなんですかあ？」

「……っ——」

言葉が詰まった。

心臓が大きく跳ね、顔がじわりと熱くなる。

（見られてた……完全に、見抜かれてた
……）

言い訳しようにも、喉がうまく動かない。

目が合わせられず、視線が泳ぐ。

だが、千春は責めるでも、からかうでもなく

ただ、いつも通りのおっとりした調子で、優しく続けた。

「大丈夫ですよお。うち、生足メイド喫茶ですから～」

「足見られるの、ぜんぜん平気なんですっ。
むしろ、気に入ってもらえたなら……嬉しい
かもです♡」

そう言いながら、また足先でスリッパのリボンをつまむ。
その指先は柔らかく、白く、ほんのり汗でしっとりしているように見えた。

祐介の視線が、また自然とそこに吸い寄せられていく。

(……この子……優しい……しかも足で攻めてくるとか無自覚すぎる……)

心臓がまだ速く脈打っているのに、どこか心がほどけていく。

この店には、“自分の欲望”を否定しない空気がある。

そのことが、祐介の理性をさらに緩ませていくのだった。

祐介の隣で、スリッパを足指でもてあそぶように遊び続ける千春。

飾りリボンをぐにゅっと潰してみたり、指先で摘んで持ち上げてみたり。

無自覚なその仕草は、まるで彼のフェチ心を試すかのように、延々と繰り返された。

「ねえ、ご主人さま……」

千春は、スリッパのつま先を脱ぎかけたまま、少しだけ首をかしげた。

「足の……どこが好きなんですかぁ？」

ふわりとした声。

問いかけ自体は、どこか他愛ない会話の続きのようなトーンだった。

だが、その内容は——祐介の心の奥を、ぴたりと突いていた。

(……聞かれた……)

祐介は喉が詰まりそうになった。

けれど、先ほどまでのやり取りで分かったことがある。

千春は、足フェチを否定しない。受け入れてくれる。

その事実が、警戒心をやわらげた。
さらに彼女のおっとりした空気、やわらかい
声、ゆるく笑う目元——すべてが、「話して
もいいかもしれない」と思わせる。

「……あの、」
祐介は小さく息を吸って、言葉を選びながら
口を開いた。

「全体的に……好きなんです。足……全体
が」

「へえ～」

「特に……足裏とか……足指とか、そういう
ところも……」

そこまで言って、唇を噛んだ。
匂いが好きとまでは、さすがに言えなかった。

けれど——それでも、今まで誰にも話せなかったことを、口に出してしまった。

千春は驚きもせず、むしろ自然に笑って、こう言った。

「そっかそっかあ〜。そうなんですね〜♪」
「なんか……そういうの、可愛いです♡」

心の奥が、ふわっと解けた気がした。
許されたような、不思議な安堵が胸に広がる。

だが次の瞬間——

「じゃあ……ちょっと、イタズラしちゃお〜」

そう言って千春は、足先でつんっ——と祐介の足を突いた。

かかとを浮かせ、指先で小さくスリッパを脱いだまま、
素足の親指と人差し指の間に祐介のスネの辺りを挟むように“つんっ”と優しく刺激する。

「ふふっ、くすぐったかったですか〜？」

にこっと笑う千春。

その足先は、もう一度、今度は左右の足で交互につん、つんっと触れてくる。

柔らかくて、ほんのり湿気を帯びた足裏が、布越しに祐介の皮膚をかすめる。

祐介は、心臓が跳ねる音を抑えられなかった。

（やばい……っ）

その足は、さっきまでスリッパの中で蒸れていた足。

祐介の目の前で何度も脱がれて、汚れた内側を晒していたその足。

今、そんな足で、自分の脚に触れている——
直接。

口では冗談のように「イタズラ」と言っているが、
彼女の素足は、確実に彼の本能を掻き立てていた。

欲望が、また一歩、境界線を越えようとしていた。

「くすぐったいですかぁ、ご主人さま〜？」

そう言って、千春はにこっと笑いながら、
もう一度、指先でスリッパのリボンを踏み潰し、床の上でぎゅっ、ぎゅっと弄ぶ。

(……完全に俺の好みを知っててやってるんじゃないか……)

祐介の脳裏に、背徳の快感がこびりついて離れない。

足を突かれるたびに、まるで自分が踏まれているかのような錯覚にすら陥る。

そのときだった。

千春がずっと身体を傾け、祐介の耳元へ顔を寄せた。

吐息がかかる距離。
ふわりと香る女の子の匂い。

そして——囁くような声で、そっと言った。

「……実はですね、ご主人さま……」

「リピーターさん向けに……ちょっとだけ“デ
ィープなご奉仕”をする……裏サービスがあっ
たり……するんですよ～♡」

「……内容はナイショですけど……もし気にな
ったら、また……来てくださいね♡」

言葉の最後に、耳のすぐ近くで甘く微笑む
声。

それだけで、祐介の背筋にゾクゾクとした快感が走った。

（“ディープなご奉仕”……………？裏サービス……………？）

具体的には何も言っていない。
なのに、もう頭の中には妄想が溢れ始めていた。

素足で踏まれる？
スリッパの匂いを嗅げる？
足を鼻に押し当てられる？
脱いだばかりのスリッパを顔の上に乗せられる？

(……っ、くそっ……気になって仕方ない……)

千春はすでに何事もなかったかのように元の位置に戻り、
いつものようにゆるく笑っていた。

* *

「今日のご指名、ありがとうございます～
♡楽しかったです♪」

「……い、いえ……俺も、すごく……」

もう言葉にならない。

祐介はその笑顔を見つめながら、心の中で固く、強く——決意した。

(……絶対、また来る。絶対、この“裏サービス”……確かめる)

そのときのために、記憶に焼き付けるように、千春の足元をもう一度見た。
まだ微かに湿ったその素足と、汚れの染み込んだピンクのスリッパ——

あの夜に嗅いだ“理想の匂い”の主が、この店の中にいる。

そして、さらにその先に待つ“ご褒美”が、確かに存在する——

欲望が確信へと変わる音が、祐介の中で鳴り響いていた。

第三章：余韻と再訪の決意

喫茶店のドアを閉めた瞬間、街の音が祐介の世界に戻ってきた。

夕方のアスファルト。行き交う人々の気配。それらすべてが、ついさっきまでの“別世界”を一層際立たせる。

(……やばかったな……)

胸の奥が、じんわりと熱を帯びている。

あの空間。可愛らしいメイドたち。素足。ピンクのスリッパ。

接客という体裁の中で、むしろ堂々と“足”が観察できる非日常。

祐介は心の中で、映像を何度も巻き戻す。

（美月ちゃん……落ち着いた雰囲気であんなに脚が長くて、スリッパも……しっかり履き込まれていたよな……）

（指の跡、黒くて……あれは絶対、一日中履きっぱなしだったやつだ……）

（千春ちゃんのもの、すごかった……リボンぐりぐり踏んでたし、足指の跡……濃かったなあ……）

脳内に浮かぶのは、スリッパの布地にくっきりと刻まれていた足指の痕跡と、湿気の層。

そこに染み込んでいる“蒸れ”と“匂い”を想像するだけで、下半身がまた疼く。

だが同時に——ふと、疑問も浮かぶ。

（でも……あの夜、こっそり嗅いだスリッパ……あれとは……なんか、少し違う気がするんだよな）

記憶に焼き付いている“あの一足”。
サイズ感。汚れの濃さ。指跡の位置。

今日見たどのスリッパも、近いものはあったが、完全に一致するものはなかった。

（ってことは……まだ、他にも“あのスリッパ”の持ち主が店にいるのか……？）

店内には、美月と千春以外にも数人のメイドがいた。

どの子も例外なく、素足にピンクのスリッパ

その中の誰かが、あの夜、自分の理性を壊した匂いの主かもしれない。

（あのスリッパの匂いを、もう一度……）

（そして、裏サービス……あれも気になる……）

想像が尽きない。

祐介は自然と歩きながら、心の中で決意を固めていた。

（絶対……また来よう）

あの空間は、ただのメイド喫茶じゃない。
自分の性癖と欲望を肯定してくれる、“理性崩
壊装置”だ。

* *

——そして、数日後。

「……ああ、またあのビルか」

祐介は勤務表を見て、思わず唇の端を持ち上
げた。

今夜の巡回ルートには、また
《FéeMignonne》が入っているビルが含まれ
ていた。

(巡回……とはいえ、タイミングが合えば……)

誰もいない、夜の喫茶店。
静まり返った店内に、従業員通用口の下駄箱。

そして、あのスリッパたち——履き込まれたまま、またあそこに並んでいるかもしれない。

(嗅ぎたい……もう一度、確かめたい……)

そう思った瞬間、またしても股間が重く疼く。

もはや、完全に祐介の理性は“ピンクのスリッパ”に支配されていた。

* *

その夜。

祐介は警備員としての制服に身を包みながら、心の中ではまったく別の熱を抱えていた。

——再び《FéeMignonne》の入るビルに巡回に来た。

その意味は、祐介にとって単なる“仕事”などではない。

自分の理性を壊した匂いと、再び出会うための“儀式”だった。

午前 2 時をまわり、ビル全体が沈黙に包まれる。

各フロアの施錠チェックを終え、静かに足を向けるのは——あのテナント。

(……誰もいない。大丈夫)

祐介は深呼吸し、音を立てぬように

《FéeMignonne》の従業員通用口へと向かった。

前回と同じく、ロックはまだ設定されていない。

カチリ……と小さく開け、祐介は中へと滑り込む。

薄暗い照明。閉店後の静寂。
そして——そこに在った。

「……っ」

下駄箱に並ぶピンクのサテン地。オープント
ウ。
ずらりと並んだかわいらしいピンクのスリッ
パ達——再会。

祐介の心臓が、高鳴りを上げる。
この中のいくつかは、自分が既に顔を合わせた
“あの子たち”のものだ。

美月、千春、その他にもあの店には可愛い子
しかいなかった。

——顔を知っている。

つまりこのスリッパの主たちは、ただの“想像の女”ではなく、**現実**に存在する魅力的な素足の持ち主たちだ。

(……だからこそ……より興奮が……っ)

祐介はスリッパが納められた下駄箱の前にそっと膝をついた。

その時、ふと目に入った。

——小さな白いシール。下駄箱に貼られていた、**名前**の書かれたテープ。

(まさか……前来た時は気づかなかった…)

祐介は祈るような気持ちで、シールをひとつひとつ追っていく。

そこには、達筆な手書きのような文字が並んでいた。

そして――

「……あった……」

「美月」

「千春」

祐介の視界が一瞬歪んだ。
血流が加速し、耳の奥で自分の心音がドクドクと響く。

(間違いない……これが……“あの子たちのスリッパ”……)

もう“誰のものか分からない想像”ではない。
目の前のこのスリッパは、ついこの間、自分のすぐ隣で微笑んでいたあの美月が、千春が、実際に素足で履いていたスリッパ。

そして、今ここに並んでいる。
誰にも気づかれることのない静かな空間に

あの可愛い子たちの足の匂いを、中にたっぷりと閉じ込めたまま。

祐介の鼻が、自然とピクリと動いた。
その先に待っている香りが、どれほどの快楽を伴うものか——祐介は知っている。

(嗅ぎたい……このスリッパを……)

鼓動がさらに速くなり、もう誰の足音も響かない廊下に、祐介の興奮だけが静かに濃く満ちていく――。

――「美月」

丁寧に書かれた、美しく整った筆跡。
その真下――下駄箱の中段には、あのパステルピンクのスリッパが、きちんと揃えて差し込まれていた。

祐介は、指先でそっとその一足をつまみ上げた。

とても軽いのに、手に持った瞬間に**“重み”が伝わってくる。 **

(これが……美月ちゃんの……)

深く息を吸いながら、祐介は視線をスリッパに注ぐ。

——あの美しい脚にぴったりと吸い付いていた、同じ一足。

茶色の髪を揺らしながら微笑んでいた横顔。

しっかりとした性格を感じさせる目元。

長く、引き締まったふくらはぎ。

そして、何より——あの時はしっかり見えなかった、スリッパの中。

(……すごい……)

今は見える。

生々しく、残酷なまでにリアルに。

かかとからつま先まで、全体的に淡く灰色に染まった布地。

うっすらと皮脂が重なってできたその色合いは、まさに“履き込まれた証”。

つま先——指の位置はほんの少し色が濃く、ぼんやりと足指の形に沿って、生地が凹んでいる。

擦り減った繊維。潰れたクッション性。

決してフェイクではない、“実際に誰かが一日中履いた”リアリティ。

(……ああ……やっぱり……めちゃくちゃ良い……)

手の中のスリッパを回転させ、つま先側の開口部に顔を近づける。

鼻先が、ゆっくりとサテンの縁に触れ、開いた部分からそっと中に入り込んでいく。

そして――

くんっ

たった一吸いで、祐介の全身に震えが走った。

汗の匂い。蒸れた布地特有の酸味。

さらに、親指の奥——濃く汚れた中心部からは、ふわりと“納豆に似た”熟成された匂いが香る。

刺激はそこまで強烈ではない。
だが、確かに感じる“足の匂い”。品の良さと、
隠し切れない恥ずかしい匂いの絶妙なバランス。

（……これが、美月ちゃんの足の匂い……
っ）

その事実だけで、全身に熱が巡った。
普段は凜として清楚で、まじめで……そんな
女の子の足が、こんなにもしっかりと蒸れて、
匂いを放っているというギャップ。

見た目と香りの落差が、最高だった。

祐介の鼻はもう一度、深くスリッパの奥へと押し込まれる。

指跡に触れるように、吸い込む。

くんっ、くんっ……

(……ヤバイ、勃ってる……)

警備服の下、制服の生地を押し上げるように、祐介の股間がカチカチに固くなっていた。

指の形、香り、質感——五感すべてが、“美月の足”に占拠されていた。

（この足で……踏まれたら……多分、すぐに
イッてしまう……）

鼻の奥に残る香りを名残惜しむように吸い込
みながら、祐介はまだスリッパを手から離せ
なかった。

だが……

次は——千春の名前を探す番だ。

——まだ興奮の余韻が鼻の奥に残っていた。

祐介は、理性のわずかな残り火で、美月のス
リッパを丁寧に下駄箱へ戻した。

深く息を吸い直し、震える手で次の“標的”へと
視線を移す。

「千春」——すぐ近くの札に書かれた名前を確認し、
その下に揃えて差し込まれたスリッパを、そっと手に取る。

ふわりと指に馴染む、柔らかなサテンの感
触。

そして、目に飛び込んできた“内側”。

(……あのときと……同じだ)

来店時、隣に座った千春が何度も足指で弄んでいたピンクのスリッパ。

あの記憶が、目の前の現実と完璧に重なった。

布地は、明らかに“集中的な使用”の痕跡を示していた。

踵とつま先——特に母指球から指先にかけて、黒ずんだ跡がくっきり。

生地が押し潰れ、足の形そのままに凹んでいる。

それは、“千春の足がそこにずっと乗っていた”ことの証明。

飾りの小さなリボンも、見るからに他のスリッパと比べて伸ばされたように形は少し歪み、端には黒ずみが染み込み、頻繁に足指でつままれ、踏まれていたことを物語っている。

(……たまらない……っ)

喉の奥から、自然と荒い息が漏れる。
祐介は震える手で、まず——リボンの匂いを
確かめることにした。

顔を近づけ、鼻先でふわりと撫でるように触
れ、
そして——

くんっ

「……っ、くさい……」

飾りのはずのリボンから、しっかりと“足の匂い”が香ってきた。

ほんのりと酸っぱく、微かに湿気を帯びた空気が鼻に染み込んでいく。

そこにあるのは、ただの布ではなかった。

千春の足指に弄ばれ、踏まれ、汗と皮脂を吸い込まされた“証拠”だった。

（リボンだけでこんな匂い…たまらない……）

もう我慢できない。

祐介はスリッパを裏返すようにして持ち替え、
オープントゥのつま先側から、鼻をぐっと奥へと突っ込んだ。

——くんっ、くんっっ……！

その瞬間、鼻腔に焼きつくような匂いが充満する。

強い酸味。汗がこもった蒸れた空気。
美月のスリッパよりも、明らかに濃い。強い。湿っている。

直接足指が当たっていた部分——
とくに親指の付け根から人差し指にかけて、

まるで“塗り込めた”かのように濃い足の匂いが染みついていた。

柔らかな繊維の奥から立ち昇る、女の子の“使用済み”の残り香。

鼻先に布がしっとりとまとわりつき、奥へ奥へと匂いが入り込んでいく。

(……やばい……これ……っ)

祐介の脳裏に、千春の姿が鮮明に浮かぶ。
ほんわかと微笑むあの顔。
おっとりした声。

そして、無邪気にスリッパのリボンを足指でぐにゅぐにゅと弄んでいた、あのエロすぎる足。

（この匂いが……このスリッパが……あの足の匂い……）

——もう無理だった。

理性が、完全に壊れた。

その場にしゃがみ込んだまま、スリッパを鼻に押し当てたまま、
祐介は声を殺して、静かに果てた。

下着の中、熱が脈打ち、温い精液がとめどなく溢れる。

足の匂いだけで達する——
そんな異常な快樂へ導いてくれたのが、この
スリッパだった。

達してなお、興奮は冷めなかった。
祐介の身体は、まだ火照っていた。

スーツの中でじんわりと広がる熱。
心の奥から沸き上がるのは、満足ではなく、
さらなる“欲”だった。

(……まだだ……まだ終わっていない……)

美月、千春——確かに素晴らしかった。
しかし、“あの夜”、鼻先をスリッパに押し込んだあの匂いが忘れられない。

祐介は立ち上がり、ふらつく足で、あの日選んだ“あのスリッパ”の位置へと向かった。

そこは、前回とほぼ同じ場所にあった。

——そして、確かめる。

中敷きに刻まれたその“記憶”を、目でなぞる。

(……あった……これだ……)

スリッパは小さめで、形も細い。
明らかに祐介好みの“女の子らしい”サイズ感。

布地は全体的に使い込まれ、褪せたピンク色に深く染み込んだ汚れ。

中でも——つま先に刻印された指跡が、とんでもなく祐介好みの汚れ具合と形だった。

指先部分の汚れは濃い茶色で、凹みが深く、芸術的と言っていいほどまでにくっきりと残る五本の足指跡。

(間違いない……このスリッパ……)

祐介の視線が、スリッパの上——貼られた小さな白い名前シールへと移る。

「雪乃」

その文字を見た瞬間、背中をゾクリと震えが走った。

(……雪乃ちゃん……)

(まだ会ったこと……無いよな……)

初訪問の日。一番最初に出迎えてくれた三人のメイドの中に確かに雪乃は居た——。

しかし、結局雪乃とはそれきり一度も話さなかったため、祐介の記憶に雪乃は定着していなかった。

だが、祐介の中では既に完成していた——最高の足を持つ女の子のイメージ。

（次に行ったとき……この名前で指名すれば……“この足の匂いの主”に会える……）

喉が乾き、手が震えた。

祐介は吸い寄せられるように、そのスリッパを手取る。

そして——迷いもなく、つま先の開口部に鼻を差し込んだ。

くんっ……くんっ……

鼻の奥に焼き付くのは、あの日とまったく同じ、いや、それ以上の衝撃。

凹んだ親指部分からは、濃い納豆臭——
湿気を含んだ深い発酵の匂い。
その中に、酢昆布のような酸味のある刺激が
混じる。

さらに踵や土踏まずの布地——
そこには、やや控えめながらもじっとりと染
み込んだ酸化した汗の酸っぱい匂いがあっ
た。

納豆の奥に、“酸っぱさ”の層がしっかりと広がる。

そして最後に余韻のようにほのかに香る女の子の甘い匂い――

(……これだ……この匂い……本当に……最高すぎる……っ)

まだ見ぬ“雪乃”という存在。
彼女の顔も、声も、性格も知らない。
だが、このスリッパが語っている。彼女の足は間違いなく、極上だ。

祐介はスリッパに鼻を押し当てたまま、うっとり目を閉じた。
記憶の中で、想像上の雪乃が微笑む。

その足でスリッパを踏みしめながら——
足元ではこんなにいやらしい匂いを漂わせて
るとはだれも思わないような可愛い笑顔で接客する……

(雪乃ちゃん……雪乃ちゃん……)

その幻に溺れるように、祐介の全身が硬直する。

再び、抑えきれない興奮が股間を駆け抜け

——

祐介は、スリッパの匂いを吸い込みながら、
再び果てた。

下着の中で、再び熱く、ぬめるような感触が広がっていく。

でも、それすらも“ご褒美”のように思えた。

この匂いの主に、会いたい。次こそは——必ず。

幕間：休憩室の午後

生足メイド喫茶～FéeMignonne～の休憩時間。

裏手の小さな休憩室には、ふかふかの丸いソファと、小さなテーブル。

その上にはミネラルウォーターと、汗拭きシート、簡単なおやつ。

今日は美月、千春、雪乃の三人が、シフトの合間に一緒に腰を下ろしていた。

「ふう……今日もなんか、足がむずむずするねえ～」

そう言ってスリッパを脱ぎ、素足をぱたぱたと浮かせたのは千春。

テーブルの下で自然に足を組み替え、スカートの奥から白くかわいい足指が無防備に覗く。

「……千春ちゃん、またスリッパの中、汗びっしょりになってるんでしょ？」

呆れたように笑ったのは美月。

けれど、彼女も同じく、足元からふわりとスリッパを脱ぎ——踵をくるっと浮かせて空気にさらしていた。

「えへへ〜。指の間がぺたぺたしてる時、このリボン踏むと気持ちよくて〜ちょっとクセになってるんだよね〜」

「クセにしないでよ、千春ちゃん……リボンぐにゃぐにゃになってるじゃん」

「えーだって、指でつまむの気持ちいいんだもん〜。指の間の汗も拭けるし〜」

その布地には、黒ずんだ五本の指の跡——彼女自身の“足の癖”が今日もしっかり染みついていた。

「……でも、うちのスリッパってさ、ほんと匂い溜まるよね」

ぽつりと、雪乃が呟く。

長い黒髪を後ろでまとめ直しながら、ずっと足を伸ばし、親指を軽く反らせる。

「うん、たまに脱ぐと……けっこう……ね？
“くる”よね」

美月が苦笑しつつ、足裏を扇ぐように動かす。

その動きに合わせて、ほんのりと湿った空気が漂ったような気がして、三人の間にくすくすとした笑いが起きた。

「この前、お客さんがずっと私の足元見てたんだよ～」

「え、誰？あたしも見られてたから同じ人かも～」

「そのお客さん、私が近くに行ったとき、視線がずっと足もとに釘付けで～」

「うわっ……本物じゃん」

「そーなんだよー。でも……ちょっと嬉しかったかも」

照れくさそうに笑う千春。

雪乃はそれを聞いて、ふっと目を伏せた。

「……まあ確かに、わかる。ちょっとだけ、ね。足、見られてるのに気づくと……なんか、意識しちゃうよね」

「うんうん、わたし、足見やすいようにスリッパ脱いだまま座ってみたりするよ～」

「千春ちゃん、それ絶対わざとやって楽しんでるじゃん……」

三人の笑いが、ゆるやかに広がった。

だが、どこかに**“見られている”ことへの無意識な快感**が、ほんのりと混じっていた。

部屋には、ふと漂う微かな酸味。

素足にサテンのスリッパを長時間履いた後の、ほんのり湿った空気が満ちていた。

それは、彼女たちにとって何気ない日常の一部。

だが、もし足フェチの誰かがこの空間にいたなら——きっと、その空気だけで理性を破壊させられるだろう。

第四章：再来店

——休日の午後。

素足メイド喫茶～FéeMignonne～の入り口前で、祐介はしばらく立ち尽くしていた。

制服ではない。

今日は完全な“客”としての姿。

だが胸の奥で鳴り続ける鼓動は、前回以上に激しかった。

(……………ついに……………今日……………)

あの夜。

ついに名前を知ったあのスリッパ。

そしてそこに刻まれていた匂い。

あれほど強烈で、完璧に“理想”だった足の匂いを放つ主——その正体を、今日知るのだ。

祐介はドアノブにそっと手をかける。

カラン——と小さなベルが鳴ると、店内の空気がふわりと迎えてくれた。

甘い香り、紅茶の湯気、微かなアロマの香り、そして……思い出す“湿った空気の記憶”。

「お帰りなさいませ、ご主人様♪」

メイド服に身を包んだスタッフが笑顔で出迎える。

前回と同じ、落ち着いた雰囲気の内装。

そして——その中を歩く数人のメイドたちの、ピンクのサテン地のオープントゥスリッパ。

もう祐介は迷わなかった。
席に案内されるとすぐ、落ち着いた声で告げた。

「……雪乃さん、指名で」

数分後。

ついに恋焦がれた“足の匂いの主”が、カーテンの向こうから姿を現した。

「ご主人様、雪乃です、よろしくお願ひしますね♡」

その瞬間——祐介の息が止まりかけた。

(……可愛い……)

黒髪セミロング、つややかな瞳。

白く透き通る肌に、どこか和風の凛とした印象を残しながらも、微笑む表情はとても柔らかい。

細身でありながら、しなやかな曲線を描くウエストと太もも——まさに“理想的”だった。

そして何より、祐介の視線はその脚の先へ自然と吸い寄せられた。

(……履いてる……)

ピンクのサテン地のスリッパ。

名前シールの貼られた下駄箱にあった“あのスリッパ”と同じサイズ感、形、ツヤ、全てが一致している。

開いたつま先の内側。

ほんのり黒ずんだ指跡が、今も彼女の足に沿って浮き上がっている。

(……この足が……俺の鼻を壊した……あの匂いを放ってた……)

目の前にいる。

笑顔で接客し、会話を交わし、

今もその足で“あのスリッパ”を履いている。

鼻の奥に、あのとき嗅いだ強烈な納豆臭と、酸味、酢昆布のような足の匂いがよみがえる。

踵からつま先、土踏まずまで染み込んだ、女の子の蒸れきった汗の匂い。

（やばい……もう……頭おかしくなりそう……）

「ご主人様、緊張してますか？ふふ、肩がちょっと力入ってますよ～」

「……あっ……いえ、そんな……」

何とか笑顔を返すが、心は完全に奪われていた。

祐介の目の前には、まだ名前しか知らなかった“匂いの主”——雪乃が、今まさに座ろうとしていた。

そのスリッパが、ふわりと床に触れる音にさえ、耳が熱くなる。

「では、ご一緒させていただきますね、ご主人様」

雪乃は静かに、祐介の隣へと腰を下ろした。
落ち着いた所作、柔らかな微笑み。

けれど——祐介の意識は、すでに彼女の“下半身”へと集中していた。

スカートの奥から伸びる、すらりと白い脚。
そして、その先——ピンクのスリッパ。

ほんの少し内側が見えるほどに履き込まれたサテン地。

甲のリボンはうっすら黒ずみ、端はやや黄ばんだように汚れている。

前回、夜の店内で鼻を押し込んで果てた“あのスリッパ”と、完全に一致していた。

（このスリッパ……この足で……）

スリッパの中、汗が染み込んだ布地。
踵は沈み、つま先の黒ずみは五本の指のラインをはっきり残したまま——
いま、まさにそれを雪乃が履いている。

雪乃は椅子の角度を少しだけ変えると、組んだ脚をわずかに浮かせるようにして、足首を小さく回しはじめた。

キュッ、キュ……。

サテン生地が擦れ、布地のわずかな音と共に、彼女の素足がスリッパの中でうごめく。

その動きに合わせて、スリッパの縁から空気がふっと漏れたような錯覚が祐介の鼻先を刺激する。

（あ……今、中の匂いが……外に……）

脳が自動的に“あの夜”の記憶を引き出す。

すべてが、鼻の奥で再構成される。

「……ふう、今日は忙しくって、少し動き回っちゃって……」

雪乃がそう呟きながら、片足をスリッパから少しだけ抜いた。

爪先がふわりと空気に触れる。

スリッパの中の布地が、ほんのわずかに引っ張られて、汗の重みで沈んだ指跡が見えた。

（うわ……今の、完全に蒸れてる……）

湿度が視覚で分かる。

布の色が濃くなっており、先ほどまで足が乗っていた親指部分は、ほんのりと濡れて見えた。

その指は、今、祐介のすぐ横。

ほんの数十センチの距離で、かすかに動いている。

（この足……この匂い……この子の素足が……スリッパの中で……俺の理性を、壊した……）

祐介の呼吸が速くなる。

心臓が激しく脈打つ。

雪乃の声も笑顔も、頭に入ってこない。
ただ、目の前のスリッパと足指、そしてあの
匂いの記憶が、祐介の全神経を支配してい
た。

ふわりとした吐息に乗って、今にも匂いが届
きそうで――

祐介の視界は、スリッパの縁と、黒ずんだ中
敷きに釘付けのままだった。

祐介は雪乃の足元から目を逸らせなかった。
それは彼自身も分かっていた――

意識していないふりをしようとしたって、視
線は勝手に吸い寄せられる。

ふと、雪乃が小さく笑った。

「……ご主人様、もしかして……私の足、ずっと見てませんでした？」

ドキリとした。

思わず視線を上げると、雪乃はどこか微笑ましそうに彼を見つめていた。

「ご、ごめんなさい……っ」

祐介は焦って言葉を濁すが、雪乃は首を横に振った。

「ううん、謝らないでください。だって、うちって“生足メイド喫茶”ですから」

そう言って、雪乃は足元を見下ろし、片足をわずかに浮かせるようにしてつま先をぴょこんと動かした。

スリッパの中から、その動きに合わせて柔らかな音がわずかに漏れる。

さっきまで足裏が密着していたであろう布地が、わずかに“吸い付いた”ような感触を残して。

「見られてるの、分かってました。けど……嫌じゃないです、むしろちょっと嬉しいです」

(……まただ……)

美月も千春も——この店のメイドたちは、なぜこんなにも自然に受け入れてくれるのか。

否定も、嫌悪も、警戒もない。
むしろ、“そういうお客さん”が来ることを理解した上で、距離を縮めてくる。

その優しさに、祐介の中の壁がまたひとつ崩れていった。

躊躇っていた。けれど、もう止められなかった。

ずっと気になっていた、あの言葉。
前回、千春が耳元で囁いた、“裏サービス”。

「……あの、雪乃さん」

「はい？」

「ちょっと……聞いてもいいですか……」
祐介は言葉を選びながら、声を落とす。

「……この前、千春さんに聞いたんですけど
……ここって、“裏サービス”みたいなの、ある
って……」

雪乃の瞳がわずかに見開かれた。
驚いたような反応——だが、すぐに柔らかく
微笑みに戻る。

「……なるほど。千春ちゃんに聞いたんですね」

「それなら……納得です」

雪乃は頷きながら、ゆっくりと足を組み替えた。

その動きに合わせて、スリッパの中で汗の馴染んだ布地がきゅっと沈み、
わずかに黒ずんだ指跡の一部がちらりと覗いた。

「ご主人様がそこまで興味を持ってくれたなら……」

「裏サービスのこと、ちゃんと説明しますね。」

その声色は、いつもの落ち着いたトーンのまま。

けれど——どこか含みのある、深い甘さが混じっていた。

(ついに……聞けた……)

祐介の胸の奥が熱くなる。

次の言葉を待つ間にも、雪乃のスリッパの中に染み込んだ“あの匂い”が、脳裏に蘇ってくる。

次の瞬間、自分がどこまで堕ちてしまうのか

もう、後戻りなどできないと分かっているながら、祐介はただひたすらに、その続きを欲していた。

雪乃は、足を組み替えたまま、静かに祐介に向き直った。

その表情はやはり、落ち着いていて優しい。けれどその奥には、どこか大人びた“含み”のようなものがあつた。

「……ご主人様は、前回は初めてだったんですよね？」

「はい……」

「本当はですね、こういうお話って、最低でも 5 回以上は来てくださってるような常連さんにしか、ちゃんにご案内してないんです」

雪乃は小さくため息をつきながらも、口元を緩めた。

「千春ちゃんったら……ほんと、たまに抜けてるっていうか、無邪気っていうか……ふふっ」

祐介は思わず頷きながら、内心では「ありがとう千春ちゃん」と全力で感謝していた。

雪乃は少しだけ体を前に乗り出し、祐介の耳元に近づく。

「ご主人様もご存じの通り、うちって“生足メイド喫茶”っていう、ちょっと特殊なコンセプトなので……」

声を落としながら、雪乃はさらに続けた。

「表向きのサービスは、もちろんメニューにもある通りなんです。チェキ、一緒にゲーム、トークタイム……そういった“健全な癒し”ですね」

「でも、それとは別に……**常連さん向けの“裏サービス”**というものが、実は存在します」

祐介の喉が、無意識にごくりと鳴る。

「奥の方にある、完全個室……一人のお客様専用で作られた特別なお部屋で……」

「たとえば——ひざ枕、ハグ、手を繋いだり、お触り、添い寝……そういう、ちょっと距離の近い癒しをご提供することがあるんです」

言葉のひとつひとつが、祐介の脳をじわじわと溶かしていく。

「もちろん、メイドが“嫌がらないこと”であることが前提ですけど……」

「足のお触りやひざ枕を希望する方は多いですね。お店のコンセプト的にも、うちはそういう“癒し”に寛容ですから」

そして——雪乃は、ほんの少しだけ声を落として微笑む。

「中には……ちよつとここでは言いづらいようなことを希望されるご主人様も、いらっしやいますよ」

あえて具体的には語らずに、匂わせる。

その雪乃のさじ加減が、むしろ祐介の妄想をさらに掻き立てた。

（足のお触り……添い寝……雪乃ちゃんにひざ枕されながら……あのスリッパの匂いを……っ）

今にも想像だけで果てそうになったその瞬間

「——あっ！ご主人さまぁ♪」

唐突に、明るく伸びた声。

振り返ると、おっとりした笑顔の千春が、店内のカーテンの隙間からぴょこんと顔を出していた。

そして駆け寄るようにして、祐介の席へとコトコと近づいてくる。

「やっぱりまた来てくれたんですね～！うれしい～♡」

小さく両手を振りながら近づいてくる千春。足元では、あの日と同じ、くたびれたリボンのついたピンクのスリッパが履かれていた。

「ちょっと千春ちゃん……先に話しちゃったんですね？」

雪乃が笑いながら言うと、千春は無邪気に首を傾げた。

「えへへ……ご主人様、ぜったい好きそうだったから……つい♡」

その“無自覚な優しさ”が、
また一步、祐介を深い底へと引きずり込んでいく――。

「千春ちゃんも嬉しそうだし……」

雪乃は、祐介と千春を見比べながら、ふっと優しく微笑んだ。

「せっかくだから、まずは千春ちゃんが……
ご主人様の“裏サービス”、お相手してあげたら
どうですか？」

「……えっ？」

千春が瞬きをしたあと、ぽんっと両手を合わせた。

「いいのお？ほんとに？」

「うん。だって千春ちゃんが“紹介者”なんです
し、ご主人様もきっと安心できると思います
し……ね？」

雪乃がそう言って祐介に目を向ける。

その視線はどこかあたたかく、でもほんの少しだけ“譲る”ような柔らかさを帯びていた。

祐介は一瞬、迷いかけた。
今この場にいる雪乃も、もちろん惹かれる存在だった。

その黒髪、優しい微笑み、そして何より——
あのスリッパの匂い。

でも。

（千春ちゃんも……負けないうらい、可愛い）

おっとりした声、自然体の振る舞い、リボン
を指でいじる癖。スリッパからちらついてい

た足先の、柔らかそうな指。

あの匂いの記憶だって、強烈に残っている。

何より——“裏サービス”という扉を最初に開いてくれたのは、千春だった。

(……この子になら……任せても、いい)

祐介はゆっくりと頷いた。

「……はい。お願いします」

「わぁ～い♡ご主人様、じゃあ、こっち来てくださいっ」

千春は嬉しそうに声を弾ませると、祐介の腕を軽く引いた。

まるで遊園地にでも誘うかのような無邪気さ——けれど、その先に待つものは、まったく違う意味で“夢のような体験”だと祐介は理解していた。

歩きながら、視界の端にふわっと揺れる千春のスカート。

床に吸いつくように音を立てるピンクのスリッパ。

その中に、彼が深夜、鼻先で味わった“あの匂い”が今も染み込んでいる——

奥に続くカーテンの先。

「スタッフ専用」の札がついた、その向こう側。

今、祐介は一線を越えようとしている。

* *

千春に手を引かれて入ったのは、喫茶店の奥

「スタッフルーム」と書かれた、カーテン付きの細い通路のさらに奥にある、**完全個室の空間**だった。

照明はやや暗めに設定され、天井の間接光がふんわりと室内を包み込む。

大きめのソファ、ふわふわのクッション、ローテーブルにはハーブティーとミネラルウォーター。

そして部屋の中には、ほんのりと甘い香りに混じって、微かに**女の子特有の“生活感ある匂い”**が漂っていた。

「ここ、個室ルームなんですよ～」

「リピーターのご主人様たちに、時々だけ使ってもらってて……」

千春はそう言いながら、ソファにちょこんと座った。

さっきまで接客モードだった姿とは少し違い、どこかリラックスしているようにも見える。

それが逆に、妙にエロく感じられた。

千春は足を揃え、つま先を内側に向けるようにして座っている。

その足元には、ピンクのスリッパ。

かかとが潰れ、指の跡が黒く染まったまま、彼女の足元を包んでいた。

「ご主人様……♡」

不意に呼びかけられて、祐介がびくりとする。

「千春と……どんなこと、したいですかあ？」

その声は、あくまでも柔らかく、そしてどこか無邪気だった。

けれど——その言葉の意味と、この個室の“空気”が合わさった時、祐介の中の“本音”が堰を切って溢れ出す。

「……千春ちゃんの、足……触らせてほしいです」

言った瞬間、自分でも驚くほど素直な声だった。

頭のどこかでは「引かれないか」「変に思われないか」と警戒していたはずなのに――

千春は、そんな祐介の言葉を聞いても、やっぱりいつもの調子で微笑んでくれた。

「やっぱり、ご主人様……脚、好きなんですね〜♡」

そう言って、彼女はスカートを少し整えると、ソファに深く腰をかけて脚を投げ出し、自分の太ももをペチペチと両手で軽く叩いた。

「どうぞ～♡好きなだけ、さわっていいですよ～」

その無邪気な誘いに、祐介の理性がまたひとつ崩れていく。

「……じゃあ……」

祐介は、隣にゆっくりと腰を下ろす。

目の前には、あの日スリッパの中に押し込まれていた足の持ち主――

その太ももが、今、むき出しで差し出されている。

祐介は手を伸ばす。
指先が震えた。

そして、千春の太もものにそっと触れた。

やわらかい。
体温がじんわりと伝わってくる。
“生”の女の子の脚の感触。

その触れた瞬間から、
また鼻の奥に“あのスリッパの中の匂い”が、勝
手に蘇ってきた——。

千春の太もものに触れた瞬間から、祐介の意識
はぼやけていた。

やわらかく、体温を含んだ肌。
“生のぬくもり”が、指先からじわじわと上って
くる。

ふに、と少しだけ押し返してくる感触に、喉
がごくりと鳴る。

千春はくすぐったそうに笑いながら、される
がままに脚を差し出していた。

(……やばい……)

指が、自然と滑る。
太ももから、ふくらはぎへ。
そのラインをなぞるように撫でながら、視線
も一緒に下がっていく。

ふくらはぎの形。

すらりと伸びた骨格のラインに沿って、ほんのり汗ばむ肌。

その先、きゅっと締まった足首――

そして――そこに履かれているのは。

あのピンクのスリッパ。

オープントゥ。サテン生地。少し歪んだリボン。

前回、彼が鼻先を押し込んで、何度も深く吸い込み、果てた“あのスリッパ”。

蒸れた素足を包み、かかとにしっかりと密着して、

指先には黒ずんだ跡が浮き上がるように滲んでいた。

(……目の前にある……)

しかもそれは、本人の足に履かれている状態。

(……抑えられるわけが、ない)

自然と、手が動いた。
ふくらはぎから、ゆっくりと滑るように——
足首へ。

ぬるりとした湿気を帯びた肌。
指を這わせると、ほんのり吸い付いてくるよ
うな、汗の薄膜。

「んふ……足首、ちょっとくすぐったいかも
～♡」

千春は軽く笑いながらも、拒まない。
むしろ、祐介の手のひらが触れていることを
楽しんでいるようにも見えた。

祐介は、気づけばソファの下——千春の正面
で、膝をついていた。

彼女の脚を見上げるようにしながら、両手で
そっと足首を支える。

その上には、あのスリッパ。
生地縁には、彼の鼻が擦り寄せたあの夜の
記憶が残っていた。

(……この状態で、嗅げたら……)

脳内にまた、あの濃密な匂いの層が蘇る。強い汗の酸味、皮脂の発酵したような匂い――。

今その匂いを発している張本人が、素足に触れることを許してくれている。

祐介は、目の前のスリッパを見つめながら、心臓の鼓動が徐々に速くなっていくのを感じていた。

そして、祐介は堰を切ったように小さく口を開いた。

「……千春ちゃん……その……」

声が震える。だが、もう止められなかった。

「……スリッパ……脱がせても……いい？」

少しの沈黙。

けれど千春は、すぐにふわっと笑った。

「え～、ほんとに？ ご主人様、そんなに千春の足好きなんですかあ～？」

悪戯っぽく微笑みながら、左足を少し持ち上げ、祐介に向けてそっと差し出した。

「……うん、いいですよ♡どうぞ～」

許された瞬間、祐介はゆっくりと手を伸ばした。

サテンの生地に指が触れる。

かかとの潰れた部分を少し持ち上げ、指をかけ、そっと引く――

擦れるような音を立てて、スリッパが、足から脱げる。

湿り気を帯びた空気が、足元からふわりと抜けていく。

中から現れたのは、千春の白くて柔らかな素足——そして、

真っ黒に汚れ、踏みしめられて湿り、凹んだスリッパの“布地”。

(……これが……)

目が釘付けになった。

つま先部分。

五本の指の形が明確に浮かび上がり、特に親指と人差し指の部分は異様なほど黒く沈んでいる。

それだけではない。生地は明らかに凹み、足の力が指先に集中していた痕跡がはっきりと残っていた。

表面の繊維は摩耗し、湿気を帯びて光っている。
今しがたまでその上に千春の足が乗っていた。

蒸れ、汗、皮脂……すべてがこの中に染み込んでいる。

（くさい……絶対、くさい……でも……最高すぎる……っ）

祐介は無意識のうちに顔をスリッパへと近づけていた。

つま先の縁に鼻が触れそうになる——その瞬間。

「ふふ……ご主人様あ？」

千春の声が、照れ笑い混じりに降ってきた。

「そんなにスリッパに顔近づけたら……その……匂いとかしちゃうかもだから……恥ずかしい……」

——ズンッと、身体の奥に何かが落ちた。

(……ダメだ……これ……)

その言葉だけで、祐介の中の理性がまたひとつ溶けた。

本人に言われた。“スリッパが匂うかもしれない”と。

しかも、照れて笑いながら、恥ずかしそうに——自身の足の匂いを自覚してる——。

その一言がトリガーになった。

祐介の股間が、苦しいほどにカチカチに膨らんでいく。

(ヤバい……もう……)

目の前にあるのは、この可愛いメイドの女の子が履いていた脱ぎたてほやほやのスリッパ。

黒ずみ、凹み、湿り――

たった今まで千春の足が乗っていたその布地が、ほんのわずかにぬくもりを保ったまま、祐介の手の中にある。

もう理性で抑えられるわけがなかった。

「……ごめん、千春ちゃん……」

呟いた次の瞬間、祐介の体は自然に動いていた……。

【この先の展開】

●ついに千春の脱ぎたてスリッパを本人の目の前で嗅ぎ、その匂いと恥ずかしがる千春の様子と言葉で限界を迎える。

●生まれて初めて秘めていた自分の性癖を告白し、照れながらも受け入れてくれた千春からのさらなる提案に大興奮。

●密室での出来事の一部始終を千春から聞き、驚きつつも祐介に興味を持つ美月と雪乃。

●後日、再度来店し、裏サービスの指名をするも想定の遥か上に行くことになる展開に理性が崩壊する祐介 etc…。

後半、これまで積み上げてきたメイド達との
関係と祐介の欲望が一気に進展&爆発！スリ
ッパだけにとどまらない怒涛の足、匂いフェ
チ描写満載の続きは製品版で！